

平成28年度第2回安城市総合教育会議 会議録

日 時 平成29年2月9日(木) 午後2時
場 所 安城市役所本庁舎 災害対策本部室
出席者 市長 神谷 学
教育委員会 船尾 恭代 委員長
加藤 滋伸 委員長職務代理者
近藤 倉生 委員
鳥居 恵子 委員
杉山 春記 教育長
出席した職員 永田博充 企画部長
(予定) 鳥居 純 行革・政策監
寺澤正嗣 アンフォーレ管理監
近藤芳永 教育振興部長
神谷秀直 生涯学習部長
神谷澄男 企画情報課長
岡田知之 中央図書館長
石川芳弘 中央図書館主幹
早川雅己 総務課長
渡辺恭二 総務課主幹
兵藤伸彦 学校教育課長
仲道雄介 企画情報課課長補佐
筒井良廣 総務課課長補佐
鳥居貴之 学校教育課課長補佐
加藤里奈 企画情報課主事

傍聴者 なし
開 会 午後2時
日 程

第 1 開会

第 2 市民憲章唱和

第 3 あいさつ(要旨)

神谷市長あいさつ：本日はアンフォーレと学校図書館との連携のあり方や外国人児童生徒について協議したい。

船尾委員長あいさつ：今年度重点的に取り組んだ命の教育がうまくいっていると感じる。新学習指導要領では、知識を使って何ができるのかが大切となってくるので、安城市が掲げている「つながるヨロコビ、かなえるヨロコビ」ということがまさに教育界で考えられている。これまでの教育活動でも行われてきたが、さらに広い視野から皆の幸せのためになることを考えたい。

第 4 議題（要旨）

議題（1）アンフォーレと学校図書館との連携について

このことについて、中央図書館長及び学校教育課長が説明する。

神谷市長：全国的に子どもたちの読解力の低下が言われているが、本市の子どもたちの読解力はどのような状況か。

学校教育課長：具体的な数字は把握していないが、学校からは読解力の低下について報告はなく、教育委員会としてもそのような認識はない。

近藤委員：中学校ではほとんど図書館の団体貸出が利用されていないとのことだが、本来中等教育で読むべき本が読まれていないということならば安城市としてどうしていくべきか考える必要がある。予想であるが、今の中学生はほとんど本を読まないのではないか。読解力＝読書量とは思わないが、アンフォーレと学校図書館との連携という観点ではどういう書籍を用意していくか考え、アンフォーレを戦略的に活用していくようになればいいと思う。現在中学生の読書の傾向について、わかっていることを教えてほしい。

中央図書館長：昨年度、子ども読書推進計画第 3 次計画を作った。その中の不読率、1ヶ月に1冊も本を読まない子どもは、国の平成 24 年の調べでは小学生 4.5%、中学生 16.4%、高校生 53.2%である。国はこれを 10 年後には半減させるという目標を持っており、本市においても不読率を半減させるという目標がある。アンフォーレでの戦略としては、中高生をターゲットとした「ら B o o k s コーナー」を設け、読みやすいライトな本を 2 万冊用意し、中高生だけでなく大人も含めて本に親しめるコーナーを作っていく。また、小学生向けには「読書通帳」を作成し、1冊貯まると何かプレゼントするなど本に親しむ仕掛けを考えていきたい。

学校教育課長：現場からみると、読書について中学生においては「二極化」していると考えられる。部活動や勉強をしていて物理的に読むことができないということもある。その中での戦略として、朝 15 分間読書をしていて本の面白さに気づく生徒もいる。アンフォーレとの連携で本の集配が始まるので、本の充実を考えたい。

近藤委員：15 分間の読書タイムでどういう本を選定しているのか。

学校教育課長：生徒は好きな本を選んでいる。漫画本については、歴史や人物の本がある。本は学級文庫や学校図書館のものだが、これがアンフォーレと

の連携で充実してくると考える。

近藤委員：中学生にとっての読書は世界が広がるものであり、新書なども揃えてもらいたいと思う。

船尾委員長：本が好きな子はすごく読むが、本を好きになるきっかけについて、中学校というよりはもっと小さい頃に好きになると思う。安城市は新美南吉ゆかりのまちであり、0歳からの読書環境を整えることが本を好きになる近道ではないか。ブックスタートから始まり、図書館での読み聞かせ会に行ったり、保育園に行ったりして本に触れることができる。保育園幼稚園での読書環境は大切であり、それを引き継いでの小中学校の読書環境の整備であれば、本を好きになると思う。そういう意味で0歳から本を好きになるという環境整備をお願いしたい。

近藤委員：0歳児からの読書について、世情や家庭の背景が関係すると思う。アンフォーレの開館にあたっては、経済的に恵まれない子どもたちが幼少期から読書に親しめると良いと思う。読書ができない家庭に支援できれば読書の底上げができる。

中央図書館長：ブックスタートについては、4ヶ月児健診で渡しているが、親にとっても初めての読み聞かせになる。親によっては子どもの頃の読書経験がなくても、自分の子が本に興味を持つのを見て親が気づくことがあるので、親のためのブックスタートという意味合いもある。また、読み聞かせの環境については、図書館だけでなく、公民館、学校や保育園などでも行っているのだからかなりの時間が設けられている。本市のすべての公立幼稚園・保育園では出前で一部はボランティアを活用しての読み聞かせもしている。そういうことも今後子どもたちにとって良い影響が出てくると思っている。

杉山教育長：図書環境という面では、図書の増強や配送が始まり充実する。それに加え、今後は学校図書館教育アドバイザーを配置していく。詳細は今後決めていくが、環境が整備されるので指導という面でも強化していく。具体的には、現在教育センターにいる4名の校長退職者のうち1名を図書館教育に特化させる予定である。

加藤委員：本の貸し出しという点で、朝の読書は全中学校でやっているのか。中学校は図書館からの団体貸し出しが少ないということであるが原因は何が考えられるか。

学校教育課長：団体貸し出しは学習資料として使うことが中心なので、小学校に比べ、中学校はそういう学習形態が少ない傾向がある。

加藤委員：必ずしも中学生の貸し出しが少なく問題となっているわけではない。ただ、今後中学生も団体として学習資料に使っていくという方針はあるのか。

学校教育課長：今後は増やしていきたい。これまでは教員の勤務形態として小学校と中学校で違っていたので借りにくいところもあったが、今後は配送が行われるので改善される見込みである。

加藤委員：集団貸し出しの数も大事だが、生徒や教員それぞれが興味や関心を示して本を借りるという個人貸し出しも重要だろう。中央図書館、公民館、学校図書館が連携して情報交換していくと良い。全中学校で学校司書を配置するということで、貸し出し数が増えているということであるが、司書教諭と学校司書との関係はどのようになっているのか。

学校教育課長：授業について連携する部分はあるが、司書教諭は担任を持っており図書館業務に割く時間は多くない。図書環境整備については学校司書に任せている部分がある。

加藤委員：学校司書を配置してきたことで、子どもたちの読書環境は整ってきたと思う。アンフォーレができると、アンフォーレの司書と学校司書との連携はどうなるのか。

中央図書館長：平成 25 年に学校司書が配置されてから毎月 1 回情報交換や研修等連絡会を開いてすでに連携している。今後はさらに連携を強化していきたい。

加藤委員：学校図書館教育アドバイザーについて、教育センターに配置するということか。

杉山教育長：席は教育センターに置くが、時々で学校やアンフォーレに出向く。

加藤委員：教育センターにはさまざまな教育設備があるが、アンフォーレとの連携はどうか。

中央図書館長：貸し出しは教員のみだが、教育センターの図書については、平成 20 年からシステムで連携している。

鳥居委員：書籍の配送はありがたいと思う。私自身も読書の機会が減っているので、親が本に触れているのを子どもに見せたい。

議題（2）外国人児童生徒について

このことについて学校教育課長が説明する。

神谷市長：多様な外国人児童生徒がいる中で、少数の言語を使う外国人児童生徒の対応はどうしているか。

学校教育課長：近年増えてきた中国人児童生徒に対する通訳が見つからないということがあったが、今は 3 名確保できている。それも人づてに見つけているので、少数言語での人材確保は難しいのが現状である。

近藤委員：国際学級の授業については、おおよそ学年別になっているのか。

学校教育課長：まずは学年、あとは日本語の習得率にあわせて選別し、4,5 人程度で授業を行っている。

船尾委員長：近隣市との比較で、安城市ではこれまで初期指導教育がなかったとのことだが、どうしていたのか。また今後やっていく形態はどのようなものか。

学校教育課長：これまでは、外国人児童生徒の多い学校には県から加配教員が送られるのでその教員が対応してきたが、加配教員がない学校については、担任が他の日本人の児童生徒と同じように指導してきた。今後初期指導教室については、祥南小学校と二本木小学校で半期ずつ実施していく予定である。課題としては、学区外の子どもについては家族の送迎が必要になるのでやってもらえるかどうか。また、授業時間数によって給食をどうするかといったシステム的な課題もある。

神谷市長：外国人児童生徒の家庭環境は多様であるが、送迎が難しい場合の通学方法はどのようにするのか。

学校教育課長：そのところが難しい。2箇所で行うのも、その学校に外国人児童が多いためである。

教育振興部長：初期指導教室を始めると、そこに充てていた通訳を他の学校に分散させることができるようになるので、その施策の見直しを行いたい。

議題（3）意見交換

意見なし

5 その他 命の教育について

このことについて学校教育課長が説明する。

神谷市長：昨年度は2件悲しい事案がおき、本市ではこの命の教育に力を入れてきた。

船尾委員長：「命さえあれば」と大人は思うが、子どもたちはそう思えなかったりする。自分を含めた命の大切さを実感できるような命の教育が重要。明日何か良いことあるかもという、根底には自分を好きになるということがあると思う。アンケートで「自分のことを好きかどうか」という質問があったが、あの中で「どちらかといえば好き」以上の割合が7割を越える様になると良いと思う。

近藤委員：昨年度の事案とは関係ないが、子どもの自殺と「いじめ」は切り離せないと思う。人間性が破壊されるようなこと、自閉症や鬱（うつ）のようなことはいじめが原因であったりする。学校現場で求められるのはいじめの兆候を掴むことであると思うが、それが見過ごされている現状があるので、方策を検討する必要があると思う。

船尾委員長：これまで安城市ではいじめによる自殺はなかった。その点について教員たちは努力して未然に防いできたと思う。

神谷市長：いじめに関しては程度の差はあれ、日常的に起きている可能性はあ

るので対策はしっかりと進めていただきたい。本市でいじめに関して取り組んでいることはあるか。

学校教育課長：いじめ対策については、週 1 回いじめ対策委員会を開いて情報交換を密にしている。また、学期 1 度のアンケートも行い、追跡調査も行っている。すぐに解決するものもあれば、継続観察していかなければいけないものもあり、しっかりと把握して進めている。今の子どもたちは自己肯定感が低い傾向があるので、本市だけの傾向ではないが、自己肯定感が高まる、自信が持てるような取り組みが必要である。いじめを掴むためには教員が子どもにどれだけ寄り添う時間が持てるかということが重要なので、これらのことに力を入れたい。

神谷市長：総合教育会議は昨年度から開催しているが、この制度ができたきっかけは大津市のいじめ自殺事案であり、常日頃から市長と教育委員会とで情報交換をしておく必要があるという背景がある。また、非常時には緊急で会議を開くこともある。

6 閉会

午後 3 時 3 0 分